

石川淳の翻訳力

モリエール『シチリア人』の場合

三 枝 大 修

1935年に短篇小説「佳人」を発表し、本格的に「小説家」としての活動を開始する以前の石川淳、すなわち20代から30代半ばにかけての石川淳が、フランス語圏の文学作品の翻訳をいくつも手がけていたことは比較的良好に知られている。中にはアンドレ・ジッドの『背徳者』、『法王庁の抜け穴』など、のちに文庫化されて広く巷間に流布し、何十年にも渡って多くの読者に読み継がれてきた重要な訳書もある。

しかし、そういった訳業の充実ぶりにもかかわらず、石川の持つ「翻訳家」としての顔にスポットライトの当てられた研究はあまりにも乏しいというのが現状ではないだろうか¹⁾。特に、1933年からその翌年にかけて石川訳で三冊も刊行されたモリエールの戯曲は、これまでのところまったくと言っていいほど研究の対象となつたことがない。その不足を補うべく、本稿では、石川が訳したモリエールの作品の一つ、『シチリア人 (*Le Sicilien*)²⁾』の訳稿を分析し、その特徴や、後続の訳者たちへの影響を明らか

- 1) 石川淳と翻訳との関わりについて書かれた文章としては、高遠弘美「別席の閑談(これもまたオマージュ)」(『早稲田文学』1989年7月号, 82-87頁)があり、示唆的な指摘をいくつか含んでいる。また、アナトール・フランス『赤い百合』とアンドレ・ジッド『背徳者』の石川訳を一部分原文と照合しながら論じたものとして、松本真一郎「石川淳と「翻訳」——アナトール・フランス『赤い百合』を中心に」(『早稲田文学』1989年7月号, 52-57頁)が挙げられる。ただし、いずれの論考でも石川淳の訳したモリエールの作品にはほとんど触れられていない。
- 2) 以下、本稿においては、モリエールの戯曲作品を指す場合にのみ「『シチリア人』」と二重括弧を使って表記し、その邦訳については、いずれの訳者によるものであれ、「石川訳「ル・シシリヤン」」、「奥村訳「シシリー人」という具合に一重括弧を用いて表すこととする(邦題は訳者によって異なる)。

にしていきたい。

1. なぜ『シチリア人』を論じるのか

まずは書誌情報を整理しておこう。1933年から1934年にかけて石川が刊行したモリエールの訳書は、以下の三冊である。

- ・モリエール『ドン・ジュアン』、春陽堂世界名作文庫、1933年4月。
- ・モリエール『人間ざらひ』、春陽堂世界名作文庫、1934年2月。
- ・モリエール『タルテュフ』、春陽堂世界名作文庫、1934年10月。

ただし、一冊目の『ドン・ジュアン』には表題作のほか、一幕物の喜劇『シチリア人』も「ル・シシリヤン」というタイトルで収録されている。そのため、戯曲の数ということ言えば、石川淳は「ドン・ジュアン」、「ル・シシリヤン」、「人間ざらひ」、「タルテュフ」の四篇を訳したということになる。

では、本稿において、「ドン・ジュアン」、「人間ざらひ」、「タルテュフ」というモリエールの押しも押されもせぬ代表作を迂回し、一般的な知名度においても文学史的な重要性においてもはるかに劣る「ル・シシリヤン」を議論の対象にしようとしているのはなぜなのか。それは、主に以下の二つの理由による。

一つ目は、五幕物の大作喜劇である他の三篇に比べて、一幕物の「ル・シシリヤン」は数段規模が小さく、そのため、一作品全体を視界に収めながら石川訳の特徴や傾向を吟味することが相対的に容易であろうと思われるからだ。かたや、より困難な作業になることが予想される他の三作品の検討は、本稿の議論の成果を踏まえたうえで、機会を改めて行おうと考えている。

二つ目は、石川が翻訳を手がける以前にすでに複数の邦訳のあった他の

三作品とは異なり、「ル・シシリヤン」に関していえば、石川のものこそが本邦初訳だったからである³⁾。翻訳作業中、参考にできる既訳がいっさい存在していなかった以上、「ル・シシリヤン」の訳稿は石川が一から練り上げたものであると考えてよいだろう（他の三作品については、石川が既訳を参照したかどうか、別途調査する必要がある）。とすれば、他の三作品はともかく、「ル・シシリヤン」の訳稿にだけは、石川淳の翻訳作法や語学力が最も純粋なかたちで露わになっていると期待していいはずだ。

以上二つの理由により、規模においても知名度においても　またおそらくは、テキストの孕む問題系の豊かさにおいても　他の三作品に劣る小品ではあるものの、石川訳モリエールを研究するにあたっては「ル・シシリヤン」から始めるのが好適であるにちがいないと判断した次第である。

2. 四種類の邦訳

われわれの知るかぎり、モリエール『シチリア人』の邦訳は、石川淳のものを含めて四種類が存在している。他の三つの邦訳は、発表年代順に、奥村實訳（1934年）、鈴木力衛訳（1959年）、秋山伸子訳（2001年）である。タイトルの日本語訳が訳者によって若干異なるという紛らわしさはあるものの、ひとまず各邦訳の書誌情報を整理しておこう。

- (1) 石川淳訳「ル・シシリヤン」、モリエール『ドン・ジュアン』、春陽堂世界名作文庫、1933年。
- (2) 奥村實訳「シシリー人」、吉江喬松監修『モリエール全集』第2巻、中央公論社、1934年。

3) モリエール作品の日本での受容・翻訳の歴史については以下の資料が参考になる。天野敬太郎「日本におけるモリエール」、『関西大学学報』第238号、1951年4月15日、17-20頁。金川光夫「日本におけるモリエール」、鈴木力衛訳『モリエール全集』第4巻、中央公論社、1973年、453-490頁。廣田昌義「日本における『モリエール全集』」、ロジェ・ギシュメールほか編『モリエール全集』第1巻、臨川書店、2000年、xi-xxiv頁。

- (3) 鈴木力衛訳「シシリー人」、有永弘人ほか訳『モリエール笑劇集』、白水社、1959年⁴⁾。
- (4) 秋山伸子訳「シチリア人」、ロジェ・ギシュメールほか編『モリエール全集』第6巻、臨川書店、2001年。

以下、本稿において(1),(2),(3),(4)の文献を引用する場合には、出典をそれぞれ「石川訳」、「奥村訳」、「鈴木訳」、「秋山訳」と略記し、直後にその参照箇所の見出しのみを記すこととする。

3. 各邦訳の底本について

ところで、モリエール『シチリア人』の石川訳と他の三つの邦訳とを比較し、前者の特徴を洗い出してゆくという作業に入る前に、各訳者が底本として用いたエディションを特定しておく必要がある。というのも、邦訳のテキストをざっと見比べてみただけでも分かるように、石川は明らかに他の三人の訳者とは異なる版を底本としているし、また石川以外の三人も、どうやら必ずしも互いに同一の原典を翻訳しているわけではないからで

4) 鈴木力衛訳「シシリー人」については、付言しておくべきことが二点ある。一点目は、『モリエール笑劇集』巻末の「解説」において、鈴木自らが「この翻訳には井村順二君のご協力をいただいた」（317頁）と記し、協力者の存在を認めているということである。「井村順二」というのは、モリエールの他の作品の翻訳もものしている「井村順一」の誤記ではないかと思われるが、いずれにせよ、この協力者の鈴木訳への関与の度合いは判然としない。そのため、場合によっては井村が「シシリー人」の下訳の制作者である等、鈴木の実質的な共訳者であったという可能性も否定はできないのだが、本稿ではとりあえず、『笑劇集』収載の「シシリー人」は署名どおりに鈴木力衛が訳したものと考えることにする。二点目は、鈴木訳「シシリー人」が、後年、鈴木力衛訳『モリエール全集』第2巻（中央公論社、1973年）に再録されたということである。その際、訳文の見直しが行われ、『笑劇集』収載のテキストに見られた相当数の誤植が訂正されたほか、訳語もところどころ改められている。とはいえ、本稿と関わる部分について言えば、1959年版と1973年版のあいだに注目すべき異同は認められない。そのため、本稿における鈴木訳の引用は一貫して1959年版から行うこととする。

ある。

実際、石川訳と他の三つの邦訳の相違点は、どんなに注意散漫な状態で読んでいても見過ごすことのあり得ない水準のものである。というのも、両者のあいだでは、戯曲の終盤に姿を現すある女性登場人物の名前が一致していないうえ⁵⁾、作品全体の場面の区切り方すら若干異なっているからだ⁶⁾。

また、さらに詳しく見てゆけば、違いはそれのみに留まらないことが分かる。例えば、邦訳のタイトルページ。驚くべきことに、『シチリア人』のジャンル名からして、各訳者によって表記がまちまちなのだ⁷⁾。加えて、戯曲本体を読み比べてみれば、ト書きの分量やその内容が邦訳ごとに少なからず異なっていることが分かるし、そもそもト書きを除いた台詞の部分についても、綿密に見てゆけばト書きの部分ほど異同が多いわけではないもの。とりわけ石川訳と他の三つの訳とのあいだで、底本が異なることを示唆するはっきりとした相違点が見つかる⁸⁾。そのため、各邦訳のテキストの比較に入る前に、それぞれの底本の確定が必須の作業となるのである。

かたや、フランス語原典の方はどうかというと、『シチリア人』につい

-
- 5) 石川訳では「若き女奴隷」として「ザイド」(石川訳 98)という名の女性が登場するのに対し、他の三つの邦訳では「アドラストの妹(ないしは姉)」たる「クリメヌ」(奥村訳 310, 鈴木訳 160, 秋山訳 99)がその代役を務めている。
 - 6) 奥村訳, 鈴木訳, 秋山訳がいずれも 20 個の場面 (scène) からなるのに対し、石川訳だけは 22 個の場面で構成されている。
 - 7) 『シチリア人』のジャンル名は、石川訳では「舞踊劇」(石川訳 97)だが、奥村訳では「喜劇・舞踊劇」(奥村訳 310), 鈴木訳では「喜劇」(鈴木訳 159), 秋山訳では表記なし、となっている。
 - 8) 石川の訳文と他の三つの訳文の差異が最も際立っている台詞は、以下のアドラストのものだろう。「眼は空色ですな」(奥村訳 326), 「あの人の眼は青い眼だ」(鈴木訳 176), 「お嬢さんの目は青いですね」(秋山訳 130) と訳されている部分が、石川訳では、「眼の色を間近く見てあるところです」(石川訳 126) となっているのだ。これもまた、石川の用いた底本と他の訳者たちの用いた底本が同一でないことを示す相違点である。

て言えば、テキストの異同の面から見て、主に三つの版が参照すべきものとして存在している。それらを刊行年にしたがって、本稿ではそれぞれ「1668年版」、「1682年版」、「1734年版」と呼ぶことにしよう。各エディションの特徴を簡単にまとめておくと、以下のようになる。

- ・ 1668年版：『シチリア人』の初版本。表紙に記された刊行年は1668年だが、実際には1667年の秋に出版されている。作品のジャンル名は「comédie」、イジドール以外の女性登場人物の名前は「Climène」となっている。場面の総数は20。書誌情報は、Molière, *Le Sicilien, ou l'Amour peintre*, Paris, Jean Ribou, 1668.
- ・ 1682年版：テキストに1668年版との大きな異同は見られないが、いくつか台詞やト書きが付加されている。作品のジャンル名は「comédie」、イジドール以外の女性登場人物の名前は「Climène」となっている。場面の総数は20。書誌情報は、Molière, *Le Sicilien, ou l'Amour peintre*, in *Les Œuvres de M. de Molière*, Paris, Denys Thierry, Claude Barbin, Pierre Trabouillet, t. III, 1682.
- ・ 1734年版：1668年版、1682年版よりもト書きの量が多いうえ、台詞部分にも若干の異同がある。作品のジャンル名は「comédie-ballet」、イジドール以外の女性登場人物の名前は「Zaïde」となっている。場面の総数は22。書誌情報は、Molière, *Le Sicilien, ou l'Amour peintre*, in *Œuvres de Molière*, éd. M.-A. Joly, Paris, Pierre Prault, t. IV, 1734.

では、各邦訳が底本としている版は、これら三つの内のどれなのか。

四人の訳者の内、秋山伸子だけは「シチリア人」の訳文に解説を付し、「翻訳では、『ミューズたちのバレエ』台本に収録された梗概に続いて、一六六七年に刊行されたテキスト（パリの観客の前で上演されたもの）を訳出した⁹⁾」という一文で、底本を明記している。ただし、実際に訳文を眺めてみれば分かるように、秋山訳は1668年版のテキストをベースとしながらも、1682年版や1734年版のト書きまで、「訳者による補足」というかたちで角括弧に入れて適宜訳出している。

一方で、他の三つの邦訳には、このような底本の説明はいっさい見当たらない。そのため、翻訳のベースとして用いられているテキストを推定するためには、各訳書を実際にひもとき、異同箇所が多いト書きの部分を中心に、モリエールの原典との対照を行う必要が出てくる。もっとも、石川訳だけは、「ル・シシリヤン」のジャンル名が「喜劇」ではなく「舞踊劇」とされており、登場人物名が「クリメーヌ」ではなく「ザイド」、場面の総数が22となっていることから、底本は1734年版、ないしはそれを基に編まれた近代版だったのだろうと簡単に目星がつく。これは、石川訳と1734年版とで台詞やト書きの部分を逐一照合してみても妥当であると確かめられる結果であり、少なくとも石川が1668年版や1682年版のテキストを訳したのではないことはまちがいない。ただし、ごくわずかながら、「アドラストの耳にささやく」(石川訳120)といった1682年版に特有のト書きが混ざりこんでいる部分もあるため、グラン・ゼクリヴァン版 この版は、1668年版を底本としながらも、1682年版、1734年版を含む複数のエディションの異同を注で紹介している 等を参照しながら翻訳を行っていたのかもしれない¹⁰⁾。

9) 秋山伸子「解説」、ロジェ・ギシュメールほか編『モリエール全集』第6巻、臨川書店、2001年、90頁。なお、ここで秋山が「一六六七年に刊行されたテキスト」と呼んでいるものは、本稿で「1668年版」と呼んでいるものと同一である。

10) 「グラン・ゼクリヴァン版」とは、1873年から1900年にかけてアシェット社から刊行された全13巻の『モリエール全集』のことである。書誌情報は、

それでは、残る二つの邦訳はどうか。推定が比較的容易なのは、鈴木訳「シシリー人」の方であり、これは1668年版を底本としている。ただし、それと明示することなく、わずかに1734年版のト書きが訳出され、混ぜこまれてもいる。時代はやや遡るが、1942年にモリエール『ドン・ジュアン』の訳書を上梓したとき、鈴木力衛は「解説」の中で、「[翻訳には] 主としてこのグラン・ゼクリヴァンを用ひたが、場面の切り方やト書きの大部分は一七三四年版に従つた」¹¹⁾と記しているので、おそらくは「シシリー人」に関しても、底本の選択・使用法はこれに倣ったのだろう。

残る奥村訳の底本はやや見定めがたいのだが、こちらもやはりグラン・ゼクリヴァン版等を参照しながら、台詞部分は1668年版、ト書きは基本的に1734年版を用いて翻訳しているようである。ただし、「アドラストの耳元でささやく」(奥村322)といった1682年版に特有のト書きを付加している部分も皆無ではない。したがって、奥村も複数のエディションを混ぜ合わせているという点では鈴木と同断なのだが、『シチリア人』について言えば、1734年版のト書きを採り入れている部分は奥村訳の方がはるかに多く、できるだけ情報量の多い邦訳を作る、というのがこの訳者の基本姿勢であったように見受けられる。奥村訳「シシリー人」のジャンル名が「喜劇」でも「舞踊劇」でもなく、「喜劇・舞踊劇」と併記されているのはおそらくそのためだろう。

以上の考察の結果をまとめると、次のようになる。

- ・石川訳の底本：1734年版（ただし、1682年版のト書きを付加している部分もわずかに見つかる）

Œuvres de Molière, éd. Eugène Despois et Paul Mesnard, Paris, Hachette, coll. « Les Grands Écrivains de la France », 1873-1900. なお、『シチリア人 (*Le Sicilien*)』は1881年に刊行された第6巻に収録されている。

11) 鈴木力衛「解説」、モリエール『ドン・ジュアン』鈴木力衛訳、白水社、1942年、182頁。

- ・奥村訳の底本：1668年版（ただし、ト書きに関しては1682年版のものを少々、1734年版のものをかなり大々的に採り入れている）
- ・鈴木訳の底本：1668年版（ただし、1734年版のト書きがわずかに付加されている）
- ・秋山訳の底本：1668年版（ただし、1682年版、1734年版のト書きも、「訳者による補足」として角括弧で挿入されている）

4. 石川訳「ル・シシリヤン」の精度

四種類の邦訳の底本がおおむね明らかになったところで、いよいよ石川淳訳「ル・シシリヤン」の訳文の吟味に移ってゆこう。まずはフランス語解釈の正確さについてである。

言うまでもなく、石川訳に誤訳が皆無というわけではない。正誤を客観的に判定することの難しいグレーゾーンのものも除くとしても、いくつかは明らかに不適切な訳語・訳文を指摘することができる。

例えば、第四景。石川は「[二人が]別々に」という意味で用いられている「séparément」の意味を誤ってとったのか、「[二人の羊飼いが]おのおの森の中へやって来て嘆き節をうたう」と解すべきところを、「森の両側から出て来て [...] 歎きを訴へます」¹²⁾（石川訳 102）と誤訳してしまっている。また、戯曲の終盤に登場する「perfidé」という名詞について、石川はこれが男性定冠詞「le」に伴われていることを見落とししたのか、主人公のアドラストではなくヒロインのイジドールを指すものと勘違いし、「裏切り者」ではなく「薄情女」^{もの}（石川訳 133）と訳してしまっている。

12) 傍点引用者。原文：« Ce sont deux bergers amoureux [...] qui [...] viennent séparément faire leurs plaintes dans un bois ». (Molière, *Le Sicilien, ou l'Amour peintre*, in *Œuvres de Molière*, éd. M.-A. Joly, Paris, Pierre Prault, t. IV, 1734, p. 137.) 以下、本稿における『シチリア人』のフランス語原文の引用は、石川が主に参照していたと考えられるこの1734年版から行うこととする。その際、出典は「ODM」と略記し、その直後に参照箇所の変番号を記しておく。

加えて、必ずしも誤訳とまでは言い切れないものの、とりわけ秋山訳さすがに最新の訳だけあって、原文理解の正確さではこれが群を抜いている。と比べた際に、原文のニュアンスの伝達という点で物足りなく思える訳文も一つならず存在している。例えば、「おまへのすばらしいナチュラルでどうしようと云ふんだ」¹³⁾(石川訳 101)と訳されている第四景のアドラストの台詞は、意味を誤解したまま「本位記号」という音楽用語を濫用する召使のアリに対して言われたものであるから、「何だ、その「すばらしいナチュラル」ってのは？」¹⁴⁾とでもしておけば、原文の声をより正確に伝えることができただろう。あるいは、画家に扮したアドラストが肖像画のモデル、イジドールにポーズをとらせる場面。ここで、アドラストはイジドールを座らせた直後、「Levez-vous un peu, s'il vous plaît」(ODM, p. 156)と指示を出すのだが、これは石川のように起立させるためのものと解釈し、「ちよつとお立ちになつて」(石川訳 123)と訳すよりは、秋山のように動詞「se lever」を「se dresser」の意味でとり、「ちよつと背筋を伸ばして」(秋山訳 127)とした方が、前後関係から見て自然であろう。

なお、17世紀を生きたモリエールのフランス語と現代のフランス語とは、語句の意味等で隔たりのある場合も多いのだが、にもかかわらず、訳文を見るかぎり、石川はそういった言い回しをほとんどのケースにおいて正確に理解し、正しく訳している¹⁵⁾。この方面で唯一改善の余地があるのは、モリエールの時代には「片付ける (ranger)」の同義語となり得た動詞

13) 原文：« Que diantre veux-tu dire avec ton beau bécare [sic] ? » (ODM, p. 136.)

14) Cf. 「何だ、その「綺麗な八長調」ってのは？」(秋山訳 103)

15) ちなみに、東京外国語学校仏語部に在学中、学校の年中行事である外国語劇に出演し、『スカパンの悪だくみ』のスカパン役を演じたこともある石川にとって、モリエールのフランス語は決してなじみのないものではなかった(鈴木貞美編「石川淳年譜」、『すばる』1988年4月臨時増刊号, 444-445頁を参照)。

「serrer」を「ぎゅっと締めつける」という現代の意味でとってしまっているところだろうか。イジドールの肖像画、ないしは画材について言われている箇所であるから、「挟んでおいて下さい」¹⁶⁾(石川訳 128)ではなく、「これを片付けさせてください」としておけば、自然で分かりやすい訳文となっていたはずである。

とはいえ、ここまで挙げてきた程度のわずかな瑕疵をもって石川淳の語学力に否定的な評価を下すとしたら、それは暴論というものだろう。モリエール『シチリア人』のフランス語のテキストは、1734年版で勘定すれば37頁という分量をもつが、石川の翻訳に見られる明白な誤りは、すべてかき集めてみたところで十指に満たない。1933年の時点でこの作品が未訳であったことを考えるならば、それは決して多くないどころか、きわめて優良な出来だとさえ言い得るのではないか。

すでに本邦初訳にしてわずかな誤訳しか見当たらない「ル・シシリヤン」をものした石川の達成は、充分賞賛に値する水準のものであったと考えられてしかるべきだろう。

5. 石川訳「ル・シシリヤン」の特徴

語学的な面での正確さの検証を終えたところで、石川訳「ル・シシリヤン」の語彙や文体などを分析し、その特徴を明らかにしていこう。

2015年現在、石川訳「ル・シシリヤン」の訳文を読んで、その日本語がいささか古めかしく感じられたとしても、それは驚くにはあたるまい。発表から優に80年を超える歳月を経ている戦前の文章が、現在一般に流通している日本語に比して古色蒼然たる趣を漂わせているとしても、それは至極当然のことだからだ。現代の読者の多くにとって、すでに確実に読みにくいものとなってしまっている石川訳。これと比較すれば、21世紀に入ってから発表された秋山訳はもちろんのこと、1959年の鈴木訳でさ

16) 原文：« faites serrer cela, je vous prie ». (ODM, p. 162.)

訳語対照表¹⁷⁾

原 語	石川訳 (1933年)	奥村訳 (1934年)	鈴木訳 (1959年)	秋山訳 (2001年)
musiciens	伶人ら (99)	歌手達 (311)	楽士たち (161)	音楽家たち (100)
bonnet de nuit	頭巾 (106)	夜の頭巾 (314)	ナイト・キャップ (164)	ナイトキャップ (107)
[de] musique et [de] danse	歌舞音曲 (113)	音楽, 舞踊 (319)	音楽や舞踊 (169)	音楽とダンス (116)
une personne considérable	ご繁盛のお方 (114)	お豪い方 (319)	ご立派な方 (169)	立派な方 (116)
cette adorable personne	かの麗人 (119)	あの尊い美人 (321)	あのすばらしい人 (171)	あの素晴らしいひと (122)
vos femmes	お国の女子衆 ^{おなご} (121)	あなた方の女 (323)	あなたのお国の女 (173)	あなたの国の女たち (125)
les grâces	やさ姿 (122)	あでやかさ (323)	美しさ (173)	魅力 (126)
un pied	一尺 (124)	一尺 (325)	一フィート (174)	一ピエ (128)
sa femme	内方 (129)	奥さま (328)	妻 (177)	妻 (134)
sa maîtresse	お話しもの 嬖妾 (129)	お妾 (328)	恋人 (177)	恋人 (134)
voile	かつぎ 面帕 (131)	かつぎ 被衣 (330)	ヴェール (179)	ベール (136)

え 「知らぬ顔の半兵衛をきめこむ」(鈴木訳 172) のような時代があった表現が唐突に出現したりはするものの 総じて意識の度合が少なく, その訳文は現代のわれわれにとってさほど違和感なく読めるものになっている。

ただ, 興味深いのは, 鈴木訳や秋山訳とではなく, 刊行年にしてたった一年しか差のない奥村訳と比べた場合にも, 石川の訳文のそこここに見ら

17) 訳語に続く括弧内の数字は各訳書においてその語の現れる頁の番号を表す。以下同様。

れる語彙の古めかしさは際立って見えるということだ。四種の邦訳の比較が行いやすいように、原語が名詞（ないしは名詞句）であるものをいくつかピックアップして訳語の対照表を作ってみよう。戦後に出た二つの訳にはカタカナ語の使用が目立つ等、時代ごとの語彙の変遷もたしかに見てとることはできるが、刊行年にほとんど差のない石川訳と奥村訳の訳語の「古めかしさ」の差が、ひときわわれわれの興味を惹く。

つまり、石川訳「ル・シシリヤン」の訳文を構成している語彙は、おそらく1933年当時であってもいささか古風に見えたにちがいない漢語・和語にまで及び、きわめて多彩なのである。その片鱗は上の表に示されているとおりだが、もう少し付け足しておこう。

石川の筆にかかれば、「かまど (un four)」は「^{へつづひ}竈」(99)に、「彼女の眼 (ses yeux)」は「明眸」(100, 110)に、「いまいましい (maudit)」は「小面憎い」(106)に、「粗野な男 (notre brutal)」は「山男」(107)に、「手下 (mes gens)」は「一味徒党」(109)に、「すばらしい方法 (un admirable moyen)」は「秘訣」(112)に、「名声と評判 (la gloire et la réputation)」は「盛名令聞」(121)に、「すばらしく美しい (d'une merveilleuse beauté)」は「国色双びのない」(124)に、「聡明な精神 (l'esprit éclairé)」は「ご発明な生来^{きが}」(125)に、「口説き文句 (des fleurettes)」は「^{いろはなし}艶話」(129)に姿を変える。「美女 (une beauté)」を「佳人」(100)、「実を言うと (pour te dire vrai)」を「ありやうは」(119)と訳すなど、「夷齋先生」の筆の先にしばしば現れるいかにも石川的な語彙も、すでにいくつか訳稿に姿を見せている。

また、以下は意識の行われた箇所であるため、対応する原語・原文をいちいち示すことはできないが、「お裾分」(99)、「丸く納^まる」(102)、「お誂へ向き」(102)、「^{つら}面あかり」(102)、「どちを踏[む]」(107)、「指を銜へて引っこ[む]」(107)、「くたびれもうけ」(108)、「やつがれ」(108)、「けぢめを喰[ふ]」(108)、「あこがれの君と仰がれれば」(110)、「さかしら」(116)、「一狂言書[く]」(119)、「あの人たちの御意に叶ふには」(124)、「ぢ

や、よござんす」(127)、「関所は立てられ[ない]」(133)といった和語中心の表現、日本土着の文化を色濃く反映した言い回しもふんだんに散りばめられている。おそらくは当時の読者の理解を助けるために、意図的に大和言葉や日本語の慣用句を多用した、多分に同化的な というのはつまり、起点言語(17世紀のフランス語)の文化をできるだけ目標言語(日本語)の文化に回収しようとした 翻訳なのである。

そして、そういった傾向をさらに強めているのが、擬音語・擬態語の頻繁な使用にほかならない。「ル・シシリヤン」の訳文にはのべ20個ほどの擬音語・擬態語が用いられていて、中には「そつと(doucement)」(107)、「はつきり(net)」(110)等、擬態語として訳出可能な原語が存在している場合もあるのだが、多くの場合、石川はフランス語原文の中に具体的な対応物が見つからなくても おそらくは言葉のリズムを整えたり、臨場感を出したりするために 擬音語・擬態語を訳文に追加しているのだ。当該の語に傍点を付したうえで、以下に列挙してみよう。「びつたり解き明かした」(100)、「ひよつと[...]姿を見せ[る]」(101)、「しんみりと情の籠つた」(102)、「うとうとと夢みごちになる」(102)、「がたがた中から音が聞えます」(106)、「びつたり立ち切つてしまふ」(106)、「がたりともしない」(108)、「眼をぱつちりさせる」(109)、「じたばたしたところで」(109)、「おまへをそつくり独りじめにしてしまひたい」(111)、「忽ちびりつと応へる」(111)、「鍋もちんちん沸かしましょう」(115)、「ちやんと探りを入れておきました」(119)、「まんまと先方へ乗りこんで」(119)、「視線がびつたり合ふやうに」(123)、「頬のまん中をびしやりとやられた」(126)。

周知のように、擬音語・擬態語の種類豊富なことや使用頻度の高さは、他の言語と比較した際の日本語の大きな特徴の一つとなっている。ならば、石川訳「ル・シシリヤン」の随所に見られる擬音語・擬態語の付加は、そもそも多彩な大和言葉でもって綴られているこの訳文の「和」の趣をいっそう強める方向に作用していると見てまちがいないだろう。

ただし、濃厚な和のテイスト、それだけが石川訳の特徴であると即断してしまってはならない。事実、「ル・シシリヤン」の訳文には、漢学の素養で知られる夷齋のイメージそのままに、「ナチュラルをほかにしては、音韻のこと安くいづに帰せんやです」¹⁸⁾(101)、「フランス人にして嫉妬此の如しとは」¹⁹⁾(130)等、漢文調もさりげなく盛りこまれているのだ。

また、耳に心地よいリズムを生み、文章の調子を整えるという観点からいえば、石川の訳文には他にも工夫が凝らされている。それは例えば、フランス語原文において二つの名詞が並列されている際の、訳文での対句的な表現の使用である。「つれなさ酷さむご(l'indifférence ou les rigueurs)」(100)、「微笑一つ流眄一つほほえみ ながしめ(d'un souris, d'un regard)」(111)、「名あり勲あるいさを(de nom et de mérite)」(121)等がこのケースに該当するわけだが、「自由 (liberté)」という単語を「身まま気まま」(112)と訳すなど、小粋な芸当を披露してくれている箇所もあり、その自由闊達な翻訳術には驚かされる。

加えて、『シチリア人』原文中の韻文箇所を訳すにあたり、七五調を用いている点もぜひとも指摘しておきたい。石川訳「ル・シシリヤン」でいえば「第九景」の舞踊シーンで歌われる、「心は燃えていづくにも、/恋すればこそ君を追へ [...]」(114)という歌がそれである。この部分では、八行詩が二つと四行詩が一つ、七五調で訳されているのだが、リズムの面から見て出色なのは、アドラストの恋敵ドン・ペエドルによって歌われる結びの四行詩だ。秋山伸子が、正確ではあるが散文的に、「おい、ふざけた真似をしやがって、/そんな歌を歌うとは、/肩を棒で殴って/欲しいのか?」(秋山訳 120)と訳している箇所を、「おのれ知るか、うつけ者、/その鄙謡ひなうたの引出物、/おのれの肩に取らせるぞ、/思ひ知らさう棒の雨」(石川訳 117)という日本語に移し変えているのである。この内、特に二行目に注目してみしてほしい。じつは、この部分、訳者の工夫が見られるのは

18) 原文：« hors du bécare [sic], point de salut en harmonie. » (ODM, p. 136.)

19) 原文：« Tant de jalousie pour un français [sic] ! » (ODM, p. 164.)

七五調の使用に留まらないのだ。というのも、「その鄙謡の引出物」と訳されている詩行のフランス語原文には、「引出物」にあたる単語など存在していないからである。とすれば、訳文は 七五調にそそぐうえで、原文の意味だけを正確に訳出したいのであれば 「その鄙謡のお返しに」とでもしておけば充分だったところだろう。それなのに、おそらくはあえて「ひ」の音を反復させてリズムを整えるために、石川は「引出物」という訳語を捻り出しているのである。なんとも凄まじい名人芸だと言わざるを得ない。

6. 石川訳「ル・シシリヤン」の影響

ここまでの分析をもとに石川訳の特徴をまとめておくとしたら、それは、正確な原文理解に基づきつつも、多くの遊びを盛りこんでいった訳文の華やかさだということになるだろうか。豊富な漢語・和語の使用、擬音語・擬態語の多用、漢文調・七五調の活用 短い戯曲一篇を訳す中で、じつに多彩な芸を披露してくれる翻訳家の姿を、ここまでわれわれは見てきた。

とすれば、それほど華のある訳文なのだから、『シチリア人』を訳すことになった後続の訳者たちの中に、石川訳の磁場に絡めとられてしまう者がいたとしても、ことさら驚くにはあたらないのかもしれない。

もっとも、さすがに鈴木、秋山の日本語は石川のそれと隔たるところ大きく、訳文を丹念に見比べてみたところで、特筆すべき類似点はほとんど見つけることができなかった。一方、1934年刊行の吉江喬松監修『モリエール全集』で『シチリア人』を担当した奥村實は、これを訳すにあたって、すでにその前年に世に出ている石川訳をおおいに参照し、利用していた形跡がある。ただ、その種の影響関係を説得的なかたちで示すには、万が一にも謬見を広めることのないように、できるかぎり多くの根拠を挙げ、事実誤認の可能性を排しておく必要があるだろう。

そのためにはおそらく、石川訳に見られる誤訳の一つとしてすでに紹介

しておいた「森の両側から出て」(石川訳 102, 奥村訳 312)という言い回しが、奇妙なことに、奥村訳にもそのまま見出されることを指摘するだけでは充分ではあるまい。「乗るか^そ反るか、やつつけよう²⁰⁾」(石川訳 119)という日本語特有の慣用句を含んだ意識箇所が、「乗るか反るか、やれる所までやつつける」(奥村訳 321)とわずかに形を変えて奥村訳にそのまま登場することも、ぜひとも付け加えておく必要がある。それに加えて、アドラストの召使であるア리가、独り言を口にする際には一人称代名詞として「おれ」(石川訳 99, 奥村訳 311)を使い、主人の前に出れば「わたくし」(石川訳 100, 奥村訳 311)とかしこまり、ドン・ペエドルの前では「てまへ」(石川訳 113, 奥村訳 319)とへりくだる。そんな翻訳上の工夫までも、奥村は石川と共有しているのだが、はたしてこういった相似性を挙げただけで、石川と奥村の影響関係を立証するには事足りているだろうか。

意識の一致、誤訳の一致、一人称代名詞の使い分けの一致。すでに興味深い符合ではあるものの、これだけでは不十分だといえるのであれば、一字一句たがわずに奥村が石川の訳文を借用したと思しき箇所をいくつか挙げてみることもできる。なにしろ石川訳「ル・シシリヤン」と奥村訳「シシリー人」を比べてみた際に最も印象的なのは、両者の訳文が互いに類似しているというよりはむしろ、しばしば同一であるという点だからだ。もちろん、「よつくお聴き下さい」(石川訳 114, 奥村訳 319)、「あなたの敵は何者です？」(石川訳 126, 奥村訳 326)といったごく短い文であれば、期せずして一致してしまうということもあるだろう。しかし、もう少し長い文章であっても、訳文が完全に同一のものがいくつも見つかるのである。以下にそれを列挙してゆこう²¹⁾。

20) 原文：« Il faut que j'y périsse, ou que j'en vienne à bout. » (ODM, p. 151.)

21) ただし、区別する意義の認められない微細な相違点(読点の有無、踊り字の使用の有無、「檀那」と「旦那」の漢字の使い分けなど)については無視した。

- ・これこそあらゆる苦勞の中で一番つらいものぢやないか。（石川訳 100，奥村訳 311）
- ・檀那樣，どう云ふわけだか知りませんが，門が開いてゐます。（石川訳 107，奥村訳 315）
- ・あれもやつぱり，おまへが目当てなのだ。（石川訳 109，奥村訳 316）
- ・檀那樣，てまへは音楽の名手です。（石川訳 113，奥村訳 319）
- ・ああ，あの娘に会ふのが待ちどほしい！（石川訳 120，奥村訳 322）
- ・ドン・ペエドルどのお眼にかかりたいのです。（石川訳 120，奥村訳 322）
- ・恰好をつけるのにひどく骨が折れるな。（石川訳 123，奥村訳 324）
- ・しかし，あなたは多分アレキサンダアのした通りにはなさいますまい。（石川訳 124，奥村訳 325）
- ・これと一所に中へはひんなさい。（石川訳 129，奥村訳 328）

これでもまだ証拠が足りないというのであれば，以下に掲げる表で，石川の訳文と奥村の訳文を見比べてみてほしい。完全に同一とはいえないものの，ひときわ共通部分が目につく文を，いくつか抜き出したものである。

訳文対照表¹²²⁾

石川訳	奥村訳
<u>さて，うちの檀那は苦勞のお裾分をして下さる。(99)</u>	<u>さて，うちの旦那は今日も苦勞のお裾分をしてくれるんだな。(311)</u>
<u>この夜ふけに，あなたとわたくしのほかに，檀那樣，かうして通を駆け廻ら</u>	<u>この夜更に，あなたとわたくしのほかに，旦那様，かうやつて通りを駆けず</u>

22) 石川訳・奥村訳の一致する部分に下線を付した（その際，語順のちがひ，読点の有無，「わたし」と「わたくし」の差異等，本稿の議論において特に区別する必要の認められない微細な相違点については無視し，二つの訳文のあいだに差異はないものとみなした）。

石川淳の翻訳力

<p>うなどと云ふ者があらうとも思へませ ん。(100)</p>	<p>り廻らうなんて者がある筈がありませ んや。(311)</p>
<p>いつぞやわたくしに歌つて聞かせたト リオを歌はせるとしましょう。(101)</p>	<p>いつぞやわたしに唄つて聞かせてくれ たトリオを、唄はせるとませう。 (312)</p>
<p>おまへはその邸の前にゐる。中でちよ つとでも物音がしたら、すぐに灯が隠 せるやうに。(102)</p>	<p>おまえはその邸の前に立つてる。中で ちよつとでも音がしたら、すぐに灯が 隠せるやうに。(313)</p>
<p>さあ、日が出ました。一味徒党を連れ て来て、ここで嫉妬やきめが出て来る のを待ち受けることにしましょう。 (109)</p>	<p>さあ、日が出ました。皆を連れて来 て、ここであの嫉妬やきめが出て来る のを待ち受けるとませう。(316)</p>
<p>何と云つても、女の大きな望みは、そ れこそ人に恋心を起させることですわ。 (110)</p>	<p>何といひましても、女の大きな望みは、 それこそ、人様に恋心を起させること で御座います。(317)</p>
<p>もしわたしが誰かを愛してゐたら、そ の人がみんなに愛されるのを見るほど うれしいことはないでしょうに。 (111)</p>	<p>もし、わたくしが誰かを愛してゐたら、 その方がみんなから愛されるのを見る ほど、うれしいことは御座いませんわ。 (317)</p>
<p>わしの恋はおまへをそつくり独りじめ にしてしまひたいのだ。(111)</p>	<p>わしの恋はおまへを独り占めしてしま ひたいのだ。(317)</p>
<p>それで、もし誰かにうまいことを云は れたら、おまへは相手の願ひを聴き入 れるつもりか。(112)</p>	<p>それぢや、もし誰かにうまいことをい はれたら、おまへは、相手の願ひをき き入れてやるつもりか？(318)</p>
<p>よい慰みになりましょう。ここへ連れ て来て下さい。(114)</p>	<p>きつと好い慰みになりませう。ここへ 連れて来て下さいまし。(319)</p>
<p>わたしはよいトルコ人。[...]わたし をお買ひになるまいか。(115)</p>	<p>わたし、よいトルコ人。[...]わたし、 お買ひになるまいか？(320)</p>
<p>これでまづ、あの娘にゆつくり会へる と云ふものだらう。だが、きつと、あ のうるさい嫉妬やきめが相変らず傍に へばり附いて、二人の取交す話に一々 邪魔を入れるに相違あるまい。(119)</p>	<p>これでまづ、あの娘にゆつくり会へる といふものだ。だが、きつと、あのう るさい嫉妬やきめ、相変らず傍に附い てゐて、二人の会話に一一邪魔を入れ るに違ひない。(321)</p>

わたし、悦んでこの御挨拶をお受けしますわ。(122)	わたくし、この御挨拶を悦んでお受け致しますわ。(323)
でも、画伯のお腕が難を隠して下さいましょう。(122)	でも、先生のお腕前があらを隠して下さいませう。(323)
あなたのお筆がお舌とおなじやうに褒め上手なら、わたしに似ても似つかない絵姿が出来上つてしまひましょう。(122)	あなたのお筆がお口とおなじやうにお世辞上手なら、わたくしに似ても似つかない肖像が出来上つてしまひませう。(323)
ええ。ちよつとお立ちになつて、どうか。もう少し此方のはうへ。お体をかう向けて。[...]ここをもう少しお広げになつて。[...]結構。そこを、もうちよつと。ほんの少し。(123)	ええ。どうか。ちよつとお立ちになつて。もう少し此方の方へ。お体をかうお向けになつて。[...]ここをもう少しお広げになつて。[...]結構。そこを、もうちよつと。ほんの少し。(324)
かう云ふ工合にどうか。[...]もう少し此方へ。お眼をいつもわたしの方へ向けて、どうぞ。(123)	どうかかういふ工合に。[...]もう少し此方へ。どうかお眼をいつもわたくしの方に向けて。(324)
ええ、たとへアレキサンダアがここにゐて、それがあなたの恋人であらうとも、わたしはかう云はずにはゐられないでしょう。わたしは今見てゐるものほど美しいものを見たことがない、そして..... (125)	ええ、たとへアレキサンダーがここにゐて、それがあなたの恋人であらうとも、わたくしはかういはずにはゐられないのです。わたくしは、今見てゐるものほど美しいものを見たことがない、そして..... (325)
あの男は何しに来たのだ？ 何だつて取次もせずに人を上げるのだ。(125)	あの男は何しに来たのだ？ 何だつて取次もせずに人を入れるのだ？ (326)
お言葉が嘘が真か存じませんが、でも信じさせられてしまひます。(127)	お言葉が真かどうか存じませんが、でも、信じさせられてしまひますの。(327)

極めつけは、主人公アドラストが友人の画家ダモンから受け取った紹介状の訳文である。この部分は石川訳「ル・シシリヤン」の中でも際立って古風な語彙・文体で訳されているのだが、はたして奥村訳はどうなっているだろうか（ちなみに、この紹介状のフランス語原文は、特に古風でもなければ凝ったものでもない通常の文体で書かれている）。

石川淳の翻訳力

訳文対照表 2²³⁾

石川訳	奥村訳
<p>拝啓、かの絵姿の儀に就き、小生名代としてこれなるフランスの紳士を御推挙申上候。同氏は好んで士人のために<u>函</u>ることを念とせられ、小生の寄託に応じ自らこの任にお当り下されたる次第にて候。これぞまさしく斯道に於て当世第一の名手にて候。貴下が御寵愛の佳人の婉容を写さしめんと思召され候折しも、右の如き人物をお薦め申上候は、小生の微衷を貴下に致すこと之に及ぶはあらじと存じ候。因に、同氏に対して談報酬の件に触ることは一切御見合せ然るべく候。同氏は即ち利を求むるを<small>いほきよ</small>屑しとせず、事を行ふはただ盛名令聞を得るにありとなす底の君子人にて候。(120-121)</p>	<p>拝啓、かの肖像の儀につき、小生に代つてこれなるフランス紳士を御推挙申上げます。同氏は好んで有士諸氏のために<u>函</u>る事のみを意とせられ、小生の申出にもただちに応諾せられたのであります。氏は、<u>正</u>しく斯道に於ける当世第一の泰斗であります。貴下が御寵姫の婉容を写さしめんと思召さる折、かくの如き人物をお薦め申上ぐる事、小生の貴下に捧ぐる微意これより愉快なものは御座いませぬ。因に、同氏に対して報酬の件を申出らる事は一切御遠慮下され度存じます。と申すは、同氏は利を求むるを屑しとせず、ただ盛名令聞を得る事にのみ尽力せらるる君子であります。(322)</p>

上の表で二つの訳文を比較してみれば分かるように、偶然の賜物と考えるには、重複している部分はあまりにも多い。そもそも一人称を「小生」、二人称を「貴下」とする代名詞の処理の仕方が共通しているだけでもすでに十分に注目すべきことであるのに、「斯道」、「当世第一」、「盛名令聞」といった、およそ一般的なならざる訳語がいずれの訳者によっても選択されているところを見れば、この類似はなおさら偶発的なものだとは考えがたい。加えて、原文中に対応する語句の存在しない　つまり、石川の意識によって出現した　「婉容」、「利を求むるを屑しとせず」といった表現が奥村の訳文の中にまで顔を覗かせている以上、1934年の「シシリー人」の訳者が、すでにその前年に発表されていた「ル・シシリヤン」を参照し、その成果を自らの訳文に取り入れていたことは明らかだ。

ただ、だからといって、奥村を剽窃のかどで責めるべきか否かは判断に

23) 石川訳・奥村訳の一致する部分に下線を付した。

迷うところである。たしかに奥村訳に石川訳からの言葉の借用が数多く観察されるのは事実だ。しかし、一般に、翻訳すべき書物に既訳が存在している場合、新訳を手がける訳者にとって、その既訳を参照し、訳文に活かすことは、ある意味ではよりよい翻訳を世に送り出すための必要な作業、権利でもあれば一種の義務であるとさえ言えるのではないか。そのとき、仮に先行する訳に、これ以上は望めないというほどの見事な訳語・訳文が見つかってしまった場合には、ときにそれを借用することも大目に見られているというのが昔も今も変わらぬ現場の実情というところだろう。

それに、奥村の名誉のために言うておけば、彼の訳した「シシリー人」は決して石川訳「ル・シシリヤン」を無批判に継承しているわけではない。誤訳の疑える箇所、意識の行き過ぎている箇所、また逆に逐語訳調で日本語がぎこちなくなっている箇所には敏感に反応し、そういった部分では石川訳を踏襲することなく、多くの場合、より読みやすく原文に忠実な表現を編み出しているのだ²⁴⁾。

他方、くだんの吉江喬松監修『モリエール全集』中、奥村はじつに八篇もの戯曲の翻訳を担当していたわけだから²⁵⁾、既訳があるものについてはそれを積極的に参照し、効率的に作業を進めてゆく必要があったのかもしれない。とすれば、情状酌量の余地もなくはないわけだ。

いずれにせよ、真に注目すべきなのは奥村訳における訳語・訳文の借用の多さなどではなく、むしろ後続の訳者にそれほどまでに影響を及ぼし得

24) 例えば、「小さな喜劇のある一場面 (une certaine scène d'une petite comédie)」という表現を、石川は演劇用語をいっさい用いることなく「曲」の「一節(ひとふし)」(石川訳 102)と大胆に意識しているのだが、奥村はより原文に忠実に、「小さな喜劇の或る場面」(奥村訳 312)と訳している。また、「あなたの御発明な生来(さが)を以てして、申し上げる言葉の節々(ふしぶし)が何に由来してあるか、お察しのつかない筈はありますまい」(石川訳 125)といった生硬な訳文は、奥村訳では、「あなたは聡明でいらつしやるから、今、どういふ原因(わけ)でこんなお話をしたか、お察しがつく筈です」(奥村訳 325)という具合に読みやすく改良されている。

25) 「恋の医者」、「シシリー人」、「堂々たる恋人たち」、「女房学校是非」、「ヴェルサイユの即興劇」、「守銭奴」、「才女気取り」、「エリード姫」の八篇。

た石川淳の訳文の巧みさの方だろう。ありていに言えば、石川の訳語・訳文をたっぴりと取り込んでいる以上、奥村訳も実質的には半ば石川訳なのだから、鈴木力衛訳「シシリー人」を収録した『モリエール笑劇集』が世に出る1959年まで、じつに四半世紀の長きにわたって、『シチリア人』にアクセスした日本の読者は、そこに石川淳の署名があろうとなかろうと、実際のところはこの芸達者な翻訳家の訳文に触れていたことになるのである。

7. 結論

本稿では、石川訳「ル・シシリヤン」のテキストを分析し、石川淳の翻訳者としての力量や、その訳文の特徴の一端を明らかにした。また、可能なかぎり論拠を豊富に挙げるように努めながら、石川訳が後続の奥村訳に甚大な影響を与えていたことを示した。

石川淳の訳したモリエール諸作品を主題とする本研究は、まだ端緒に就いたばかりであり、まとまった成果を挙げるためには今後の継続的なりサーチが必要とされる。稿を改めたうえで、次回は石川訳「ドン・ジュアン」の検討を行ってゆくことにしたい。